

高森城合戦記

塚元秀樹

戦国末期、九州制覇を目論む薩摩島津家の前に立ち塞がった一人の武将がいた。阿蘇大宮司家臣高森伊代守惟直は、南郷七城の城主たちと共に、薩摩勢の総大将新納忠元率いる三万五千もの大軍を前に南郷武士の意地を貫き通す……

元和二（一六一六）年春、稲留新助長泰は竹駕籠に座って日向から高千穂を通り、国境の馬見原村へ向かっていた。駕籠の先手には槍を持った若侍が八人、毗を吊り上げ辺りを睥睨しながら、戦に向かうかのような厳めしい姿で歩いている。駕籠の後ろには鉄砲を担いだ若侍が五人、怪しき者がいないかと山の隅々まで目を凝らしている。

薩摩島津家が参陣した最後の戦「関ヶ原の戦い」からすでに十四年が過ぎ、新助の供をする家中の若侍は誰も合戦の経験はない。しかし、この若侍どもは今すぐ戦に出ても

少しも怯まず敵陣に斬り込むだろう。長年の戦場往来で場数を踏んでいる新助には、一目見ただけでその若侍がどれほどの性根と胆力を持っているか見抜ける。

……戦の無い時代となったが、わが島津家の家風は戦国の頃と変わらず荒々しい。若侍どもは戦慣れた古参の武者に少しも引けを取らぬ凛々しき強者ばかりじゃ。このような若侍が育つておる限り、わが島津家の先行きも安泰というものじゃ……

先頭には、新助の愛馬「鬼鹿毛」の手綱を握った家老の相良孫右衛門が、裁つ着け袴姿で杖を突きながら山道を歩いている。

九州山地の真ん中に位置する高千穂の峰を縫うような細い山道は、険しいだけでなく、平地では桜が満開だというのに寒風が吹き荒び、綿入りの袴を着ていなければ震えが



止まらないほど冷える。その寒空の下、四人の駕籠かき人足が新助の座る竹駕籠を担いで山道を歩く。平らな所など全くない急峻な山道は上り下りが続き、一人の老人を乗せただけなのに、駕籠を担ぐ人足は額から胸元まで汗にまみれ息が荒い。

新助は槍を持ち鉄砲を担いだ若侍に目をやると、遠い日の出来事が脳裏をよぎり胸が熱くなる。

新助は腕を組んで目を閉じた。揺れる駕籠の心地よさが体を包み込み、知らず知らずのうちに意識が遠のいていく。

……大地を揺るがす武者押しお侍の雄叫び、天空を切り裂く矢羽根の音、孟宗竹が爆ぜるような激しい薩摩筒の轟音が続き、やがて刃を打ちつけあう高い音が峰々に響き渡ると、首を掻き切られる断末魔の物悲しい声が途切れ途切れに漏れ聞こえてくる……

新助はうつらうつらしながらそんな夢を見ていた。

気がつくと、家老の孫右衛門が駕籠脇に片膝をついて控えている。

「大殿、お目が覚められましたかな？ そろそろ肥後の国、加藤様のご領内に入りますれば、お支度のほどお願い致します」

「そうか、では加藤家より届いた手形は手元にあるであろうな。加藤殿は万事行き届いたお家柄ゆえ、手形を拝見

などと野暮な申し出はないとは思うが、万一の備えじゃ。用意しておくがよい」

孫右衛門は微笑んで答えた。

「手形はこの通り文箱に収めておりますが、加藤家は尚武しょうぶのお家柄でござる。よもや隣国薩摩の稲留新助長泰様の武名を知らぬはずはありますまい。隠居して若殿、稲留玄蕃長信様に家督を譲られたとはいえ、大殿は島津家げんぼにその人ありと知られたる侍大将でござるぞ」

新助は苦笑いして言った。

「孫右衛門、三十年、四十年もの昔のことではないか。もう誰も知る者はおるまい。それにな、加藤家では初代清正殿が五年前の慶長十六年に逝去され、今は御年十六歳の忠弘殿ひろがご当主じゃ。戦国のままの武張った家風がいつまでも残っておるとは限るまい」

孫右衛門は年に似合わず気色けしきばんだ。

「大殿、何と申されるか！ 合志城攻め、筑紫城攻め、岩屋城攻めには島津義弘公の副将として参陣なされ、朝鮮の役では船奉行として渡海された武勲の数々、誰一人知らぬ者はおりませぬぞ。また、島津義弘公の関ヶ原の退陣のきしんに大坂より同道され、帰り着いた日向の細島で待ち構えていた伊東家家臣稲津重政を討ち取られたのは大殿ご自身ではござりませぬか！ わが島津家の関ヶ原の退陣、まさに武士

の鑑かがみとして今も語り継がれる島津家の誉でござるぞ」

顔を真っ赤にして怒りを露あらわわにした孫右衛門は続けた。

「さらに薩摩・大隅・日向三か国の太守島津又八郎忠恒様からも、岳父をよしなにとの書状を加藤様へ送られた由、大殿を丁重にお迎えなされるのは必定ひつじょうでござる」

新助は困ったような顔をした。

「これ、孫右衛門、わが娘は確かに又八郎様の嫁となったが、正室ではない。側室じゃ。正室は島津義久公の娘御であり又八郎様にとっては従妹でもある亀寿様じゃ。軽々しく岳父などと申すではない」

「側室であつても嫁は嫁でござる。端女はしためとして御殿ごてんにお上げなされたわけではござるまい。加藤家よりのお出迎えの方々には島津太守様の剪面しゅつめんをしてそっくり返つていなされ」

孫右衛門の忠義を頼もしく思っている新助だが、主思あるじいが強すぎて時おり閉口させられる。

「よい、わかつた。せいぜいめかし込んで国境を越えるゆえ、待つておれ」

新助は肩衣かたぎを身に着け烏帽子をかぶると、愛馬「鬼鹿毛」に跨またった。腰に銀造りの太刀を佩はくと、日向国紙屋の地頭として一城を預かっていた島津家重臣の威厳が滲み出る。新助が若侍たちに向かつて言う。

「よいか、此度こたびの肥後入りは儂わしのわがままな物見遊山ゆえ、お出迎えの加藤家の御家来衆にはくれぐれも非礼のないよう心掛けるのじゃ。槍の穂先は鞘に納め、鉄砲の火縄は消しておくのを忘れるでないぞ」

昨夜は日向の正慶寺で宿を取り、夜明け前寅の刻（午前四時）に出発し、馬見原村の関所に到着したのは辰の刻（午前八時）、ようやく日が昇つて暖かくなり始めた時刻だったが、すでに加藤家の侍二十人ほどが迎えに来ていた。

警護の若侍、駕籠かき人足を国境に残し、加藤家の案内で馬見原村から中坂峠、高森城下へと向かう。すでに肥後加藤家の領内に入っており、中坂峠にはゆつくり歩いても昼前には着くだろう。

その道すがら、新助は孫右衛門に言った。

「孫右衛門、思い出すのう。この山道を通つたのは三度であつたの。天正十（一五八二）年師走、天正十二年陸月、そして天正十三年晦日みそかじゃ。いつも寒かつたのでよく覚えておる」

孫右衛門が懐かしそうに答えた。

「もう三十年も前のこととござりますな。あの頃は大殿もお若うわじござつた。たしか五十前の男盛り。鎧兜よろいに身を固めてこの道を進んでおられたが、馬が不憫じゃと馬から下

りて歩かれましたな。我ら家来も大殿が歩かれたゆえ仕方なく下馬して歩いたものでござったが、鎧兜が重うて難儀をしたものでござる」

「儂もまだ元気がよい頃であつたからのう、許せ。しかし、高森伊予守惟直は曲者であつた。この儂が見事に騙されてしまうたわ」

「大殿、たしか天正十年師走、最初の高森城攻めの時でしたのう。あのおりは高森伊予守惟直殿に見事に一杯食わされ、惨い目に遭わされたものでござった」

島津勢が最初に阿蘇南郷谷の高森城を攻めたのは、天正十年十二月のことであつた。

天正十年冬、島津家当主島津義久ほか、義弘、歳久、家久の四兄弟が揃つて肥後に出陣し八代に集結した。伊集院忠棟、上井寛兼、鎌田正年、川上有信、新納忠元ら綺羅星の如き歴戦の家臣団が率いる軍勢は総数三万。その目的は肥後の国人領主の多くが島津家に臣従する中、島津家に恭順しない阿蘇大宮司家とその家宰的存在である御船城の甲斐宗運、及び合志氏、隈部氏などの国人領主に圧力をかけて帰順させ、肥後を手中に収めることであつた。

その一環として、稲留新助長泰は兵三千を率いて日向から高千穂へ抜け、馬見原口から中坂峠を越えて高森城下に

攻め入つた。

高森城を守る高森伊予守惟直は阿蘇氏庶流の末裔であり、阿蘇大宮司家家中でも重臣の地位にあつた。そしてその高貴な血筋は、南郷七城の城主であり阿蘇大宮司家の忠臣である長野城主長野越前守惟久・下田城主下田左衛門尉能継ら小領主たちの心の依り所でもあつた。しかし、火山灰の土壌である南郷谷の地は瘦せており、物成りは二万石にも満たない。それだけの取れ高では養える兵の数も限られてゐる。高森城を含む南郷七城の武者、足軽、小者をかき集めても二千にも届かぬ小勢である。

その高森城を守る将兵は三百余りであり、如何に難攻不落を誇る高森城で迎え撃つとしても、三千の島津勢に戦を挑むことは無謀であり、高森伊予守惟直は戦わずして和を乞うた。

高森城を望む羅漢山の麓の原野に陣を敷いた稲留新助のもとに、高森惟直の使いの武者が訪れた。がっしりした身体付きの武者振りの良い男が新助の前で片膝をつき口上を述べる。

「拙者、高森伊予守惟直が家来、山村大学宗久と申す。わが主高森伊予守惟直は島津薩摩守殿に弓を引く気は些かもなく降参致す所存なれば、高森城内で談合致したく願ひ奉る。ついでには、何方様か城内まで同道いただければ幸甚

の至りに御座候」

山村大学の申し出に新助が即答した。

「島津薩摩守家来、総大将の稲留新助長泰でござる。拙者ひとりにて高森城に伺い高森伊予守惟直殿と談合致す所存なれば、城内への案内宜しくお頼み申す」

慌てた孫右衛門が新助の袖をつかむ。

「殿、剣呑でござる。城内で討ち取られたら元も子も無いではござらぬか！」

新助が笑って答えた。

「高森伊予守殿は一城の主。儂の首を取れば、高森城は総攻めにされ落城するのはわかっておいでじゃ。儂の首一つと高森城を天秤にかけるようなことはなさるまい……」

高森城に入城し床几に座る総大将稲留新助に、高森伊予守惟直が口を開く。

「寄せ手の御大将稲留長泰殿に謹んで言上致す。島津薩摩守様の軍勢、わが手勢の十倍もの大軍でござる。弓箭の儀に及び、ことごとく討ち死に致せば、冥府にて高森家代々の御霊に如何に申し開き出来ましょう。されば、島津様の軍門に降ること決断したゆえ、三日の猶予を下さるようお願い奉る」

新助は穏やかな表情を浮かべた。

「伊予守殿におかれてはすでにご存じのことと思うが、わが島津家では他国の国衆の降参を諾うには四つのお約束を頂戴することになっており申す」

高森伊予守惟直は背筋を伸ばして堂々と答える。

「もとより承知でござる。人質を差し出し、起請文を納め、寄せ手の御大将に見参致し、そしていざ合戦となれば御大将の下知に従う、この四つの決め事が島津家に降る条件であることは存じており申す。さすれば、まず、南郷七城の城主の子弟より然るべき人質を差し出しますゆえ、三日の猶予を頂きとうござる。人質の手配りが整い次第、南郷七城の城主を引き連れ見参致すと同時に起請文も納める所存。その後、島津様の軍勢の一手として御大将の御陣に加わりますゆえ、ご承知いただきとうござる」

高森伊予守惟直の言葉を信じた稲留新助は高森城に将兵を入れると、人質の到着を待った。

島津家が肥後の各地に手を伸ばしていたこの時代、肥後の国人領主たちは島津家が大量を催せば怖れをなしてすぐに恭順した。肥後国内に国人領主が頼れるような強大な戦国大名がいなかったため、肥後の国人たちは容易く隣国の強者に靡いたのだった。それを知っていた新助は、高森伊予守もそのような肥後国人領主の一人であると考えていたのである。

しかし、これは高森伊予守惟直の策略であった。

高森伊予守は馬を飛ばして大友家の武将である豊後竹田岡城城主、志賀入道満輝のもとに駆け込み、援軍の要請をする。

これより四年前の天正六年、耳川の合戦で豊後大友家と日向伊東家連合軍は島津勢に敗れた。この敗戦により緩衝地帯であった日向全域を島津家に奪われた豊後の大友宗麟は、日向との国境で島津家と直接対峙することになる。今まで友好関係にあった伊東氏が治めていた日向を奪われた影響は、その後の大友氏の九州経営に黒い影を落とす。

耳川の合戦に敗れた大友宗麟を見限った竜造寺隆信は、大友氏の支配下にあった筑後に侵攻し、大友氏に従っていた国人たちは竜造寺氏の軍門に降り、筑前の秋月種実、筑紫広門も呼応し、筑前筑後は竜造寺氏の支配するところとなる。

全盛期には、肥前・肥後・筑前・筑後・豊前・豊後の六か国の太守として権勢を誇っていた大友氏は力を失い、南に島津、西に竜造寺という強敵と対峙している。その島津家と竜造寺家は大友家と阿蘇大宮司家が支配している肥後を侵蝕しようと虎視眈々と狙っていた。この時期に盟友阿蘇大宮司家の所領である阿蘇郡・益城郡まで奪われては、

大友家は喉元に匕首を突き付けられたに等しい。なんとしても阿蘇氏とその重臣である高森伊予守惟直を守らねばならない。

知らせを受けた大友宗麟は阿蘇に隣接する豊後竹田の岡城主志賀入道満輝の軍勢だけでなく、豊後直入郡の白丹城主志賀掃部助鎮隆、朽網城主朽網鎮則ら直属の家臣たちを動員し、高森城の救援に向かわせた。その数二千。力を得た南郷谷の諸将、長野城主長野越前守惟久、下田城主下田左衛門尉能継、駒返城主久木野備前守、南郷城主二子石九郎左衛門、村山城主村山丹後守、吉田城主吉田主水頭、仁田水城主仁田水長門守らが手勢を引き連れ高森城に押し寄せる。高森伊予守惟直は津留大和守、津留大蔵、山村大学宗久、山村小学宗昌ら一騎当千の家来を引き連れ高森城に向かう。

天正十年十二月二十八日夜半、三方から火攻めにして高森城を急襲し、城内を知り尽くした高森伊予守惟直が家来と共に高森城村山口から突入すると、不意をつかれた薩摩勢は慌てふためき、一気に崩れた。

稲留新助は相良孫右衛門と共に逃げて逃げた。

中坂峠を越えて馬見原口から日向へ逃げれば土地勘のある高森勢、南郷谷の諸将の軍勢に追いつかれ討ち死には免

れない。駒返峠を越え益城郡を通って八代へ抜ける道を選べば、矢部の「浜の館」に陣を張っている阿蘇大宮司家の軍勢が牙を剥いて襲いかかるだろう。また、阿蘇大宮司家重臣である御船城の甲斐宗運が黙って通すはずがない。

新助は見知らぬ土地を西へ真つすぐ逃げることに賭けた。八代には島津家の太守島津義久ほか島津三兄弟ら、薩摩の錚々たる武将が率いる三万を超える軍勢が陣を張っている。南郷谷を逃れて菊池までたどり着けば、菊池隈本（現熊本）を経て島津本隊が陣を張る八代までは島津家の睨みが効いている土地であり危険はない。

追いつがる南郷七城の手勢に苦しめられながらも、白川沿いを西へ向かい北向山中腹の杣道を通って菊池の陣内村で軍を立て直したのは、翌日の昼前であった。

三千の軍勢が二千三百までに討ち減らされた完敗であった。

「大殿、大見口ですぞ。ここまで来れば中坂峠まで二里余り、あと一息でござる。高森城跡の山桜は見頃でござらう」

孫右衛門の言葉に我に返った新助が口を開いた。

「孫右衛門、三十年ぶりだが、まるで昨日のことのようじやな……」

孫右衛門も懐かし気だ。

「大殿、高森城攻めは三度に及び申したが、いつの戦が一番思い出深いものにござるか？」

新助は笑った。

「孫右衛門、日向を離れて高千穂の峰々を越えての戦じゃ、どの戦も難儀で忘れられるものではない。しかし、負けた戦はいつまでたつても悔しき思いが残るものでな、つらつらと天正十年師走の負け戦のことを思い出しておった」

孫右衛門がはたと手を打った。

「あれは惨い戦でござった。高森伊予守惟直殿は阿蘇大宮司家の血を引くお方でござれば、あのような虚言を申されるなど思いもせせなんだ。詰まるところ、伊予守を信じた我ら薩摩の武者はよほどの田舎者であったのでござらう……」

「孫右衛門、嘘も方便というではないか。坊主の嘘は方便で、武将の嘘は武略という。さしずめ伊予守の武略が我らに勝ったのであらう」

「大殿、しかし我ら薩摩の田舎侍も二度目の高森城合戦では、きつちりと借りを返し申した」

「おお、そうであった。二度目の高森城攻めは、たしか一年余りが過ぎた天正十二年の弥生三月のことであったな」

「あの戦はあつけないものでござった。高森伊予守の騙し討ちで討ち死に致した薩摩武者の甲い合戦ゆえ、和議な

ど考えずにいきなり攻めましたれば、鎧袖一触わずか一日でわが島津家に軍配が上がり申した。南郷谷の武者は鉄砲をあまり知らなかったとはいえ、三百丁の鉄砲があればほど功を奏するとは存外のこととござった」

天正十二年春、竜造寺隆信の圧力に悲鳴をあげた島原の有馬鎮貴ありましげたかの訴えを受けた島津義久は、肥後佐敷さしき(現芦北町)に出陣した。弟の島津義弘、歳久、家久のほか、老中の伊集院忠棟、本田親貞ら重臣を引き連れ、太守島津義久自らの出陣であった。これには、そうせざるを得なかった事情がある。

筑後の竜造寺隆信は島原の有馬鎮貴を攻めるそぶりを見せる一方、すでに島津家に帰順していた合志親重ごうしちかしげの籠る肥後竹迫城たけしごに攻め寄せた。また、島津家が宇城豊野に築いた出城である「花の山城」に阿蘇勢が向陣を張っており、阿蘇氏と竜造寺隆信が連携しているのは明白であった。今、島津方である肥後の合志親重と島原の有馬鎮貴を見捨てれば、すでに臣従している肥後の天草五人衆をはじめ、島津家に靡いている肥前・肥後の国人たちが離反するのは火を見るよりも明らかである。

島津義久は、自身が大軍を率いて肥後に出陣すると同時に、日向紙屋の地頭、稲留新助に阿蘇大宮司家を牽制させ

るため、高森城攻略を命じたのであった。

天正十二年三月二十四日、中坂峠を越えた稲留新助は四千の兵を率いて高森城を攻めた。

中坂峠を北に下った新助は、兵を高森城下の矢村大明神(現高森阿蘇神社)参道入口まで進めると、そこで東の高森峠へと方向を変えて、羅漢山の北にある高森城に向かって進んだ。

矢村大明神参道から高森城までは山道を登らねばならないが、距離はわずか半里余り、鉄砲衆二百を先頭に立てた稲留勢は、三千の将兵が鬨とぎの声を上げながら高森城へ向かう山道を突き進む。

残りの千余りの将兵は、鉄砲隊百と共に矢村大明神参道の入り口に馬防ぎの柵を打ち込み、高森城後詰めご詰めの南郷七城の軍勢に備える。

山桜が点在する原野の辺りまで進むと、周囲を山に囲まれた高森城が姿を現す。

高森城は山城であるが、尋常な山城とはその造りが大きく異なる。通常、山城とは周囲よりはるかに高い山の上に築かれ、城を囲んだ寄せ手の軍勢は四方から上へ上へと攻め登って行く。しかし、この高森城は、北側、東側、西側

の三方が屏風を立てたような山に囲まれた窪地にあり、唯一南側の斜面を通ってしか攻め登れないように造られている。その姿から別名「囲いの城」とも呼ばれて難攻不落を誇っていた。

唯一攻め登れる南側の斜面もかなり急な坂となっており、城内から石や丸太を投げ落とせば、寄せ手は攻め登ることが出来なくなり立ち往生する。それでもその斜面を登ってしやにむに力攻めしようとすれば、攻めあぐんでもたついているところに、南郷谷に築かれた市下城、南郷城、駒返城、吉田城、下田城、長野城から後備えの軍勢が繰り出し、寄せ手の背後から攻め登ってくる。そうなれば、高森城から打って出た軍勢と後備えの軍勢から挟み撃ちにされ、総崩れになる。実に計算し尽くされた名城である。

しかし、稲留新助には勝算があった。
鉄砲である。

その当時、ほとんどの戦国大名は、鉄砲を和泉の堺あるいは近江の国友・日野の鉄砲鍛冶から買入れ、火薬の材料である硝石や弾丸の材料である鉛も南蛮貿易の商人を通じて手に入れるしかなかった。当然備える鉄砲、火薬、鉛玉には限りがある。特に消耗品である火薬と鉛玉は貴重で、思う存分鉄砲を使った戦をすることは容易ではなかった。

しかし、薩摩は坊津という良港に恵まれたことにより海外交易が盛んである。坊津は中国明代の文書『武備志』に、伊勢の安濃津、筑前の博多津と共に日本三津に挙げられた海上交通の要衝であり、飛鳥時代には遣唐使の寄港地であったほどの良港である。南蛮船、明国船、暹羅（現タイ国）船にとつて、日本最南端の坊津は距離的に近く安全な港であっただけでなく、彼らの欲する硫黄、刀剣などを豊富に有する薩摩は魅力的な取引先でもあった。日本で火薬の原料である硝石の需要が増加していることを知った南蛮船・明国船は、争うように硝石を満載して来航した。また、国内に鉛の鉱山をもつ暹羅国は、日本で鉛の需要が急増していることを知ると、自国から最も近い交易港である坊津を目標して鉛を売りにたびたび来航した。

もう一つの火薬の材料である硫黄も自領である硫黄島に露天掘りの鉱山があり、鉄砲を造るのに必要な砂鉄も領地である種子島で大量に産するため、腕の良い刀鍛冶が多い薩摩では、鉄砲伝来と同時に薩摩筒と呼ばれる鉄砲の生産を開始した。

こうして当時の日本で唯一、鉄砲と必要な消耗品を自国で揃えることが出来た薩摩島津家は、鉄砲をふんだんに使った軍事訓練を続けることで、その優位さを知りようになる。

弓矢の最大飛距離三町（約三百メートル）に比べ、鉄砲の最大飛距離は七町（約七百メートル）と二倍以上あり、弓矢では絶対に射抜くことが出来ない鎧であつても二十間（約三十六メートル）までの距離であれば、楽々と撃ち抜く。それまで刀槍で鎧武者を討ち取るのは至難の業だと言われてきたが、鉄砲を持つてばどんな弱兵であつても鎧武者を討ち取ることが出来るのである。

英明であり進取の気質に富んだ当主島津義久は、この鉄砲という新兵器をとことん研究し活用した。

織田信長、豊臣秀吉でさえ鉄砲は卑怯な飛び道具であり、身分のある侍が手にするのは恥辱であると考え、主家に対する忠誠心も武士としての矜持も持たない足軽に扱わせた。しかし、鉄砲のように有効な戦道具は侍に扱わせてこそ能力を発揮できると考えた島津義久は、足軽などに扱わせず、家中の武士に鉄砲を持たせた。そして常に鉄砲稽古を怠らぬよう厳しく申し付け、稽古を怠る者は容赦なく祿を減らし罰した。

島津家では一軍を率いる侍大将でさえ、馬の鞍に鉄砲を括りつけて出陣し、激戦ともなれば侍大将自身が鉄砲を放つて戦つたという。

こうして島津家は戦国時代最大の鉄砲保有国となつただけでなく、武士に鉄砲を撃たせるといふ合理的な戦術で圧

倒的な強さを誇る軍団となつたのである。

稲留新助は鉄砲衆を高森城の大手門近くまで進めると、つるべ撃ちに撃ちかけた。

石を投げ落とそうと長堀から身を乗り出した城兵は、次々に鉄砲の餌食になり撃ち倒される。島津家では独自の鉄砲の用法がある。三人の鉄砲放ちの武士が交互に鉄砲を放ちながら、前へ前へと突き進むのである。

一人が鉄砲を放つと、後ろに控えている武士が数歩前へ進み出て鉄砲を放つ。そしてその次の武士が前の武士を抜いて前へ進み鉄砲を放つ。弾の装填に時間がかかる鉄砲の弱点を三交代で装填発射することにより克服し、さらに新手が常に前へ前へと進むことで鉄砲の長所であるその破壊力を十分に引き出すことが出来る。百姓上がりである足軽にそのような前へ進みながらの攻撃など無謀であるが、武士であれば敵の弓も槍も恐れず突き進む。

二百丁の鉄砲が次々に火を噴き、城兵は反撃するどころか顔を出すことさえ出来ない。

白く塗られた長堀には幅一尺、長さ二尺ほどの狭間が開かれ、そこから城兵は矢を放ってくる。しかし、徹底した鉄砲訓練で鍛えられた薩摩鉄砲衆の狙いは正確だ。三十間まで近づいた鉄砲衆が続け様に鉄砲を放つと、三発に二発

は見事に狭間の中に吸い込まれ、高森城の弓衆は撃ち倒される。

新助は、鉄砲を怖れる高森勢を見ると、頃合いとばかりに軍勢に檄を飛ばす。

「者ども、今が切所ぞ。柵を引き倒せ！ 大手門を打ち砕いて城内に踏み込め……」

徒武者が鉄砲衆を追い越して走り抜ける。馬防ぎの柵に取り付くと呼吸を合わせて揺さぶり続ける。足軽衆は径一尺余りの大木を抱えて、声を合わせながら大手門に打ち付ける。鉄砲衆は徒武者が引き倒した柵を越えて長塀の狭間に駆け寄ると、狭間に筒口を突っ込んで高森城内に鉛玉を撃ち込み続けた。寄せ手の怒号と百雷が落ちるような鉄砲の音が山々に響き渡り、やがて轟音とともに大手門が打ち破られた。

城兵は大手門が破られると、北側の村山口と東側の高森峠口の搦め手から山伝いに逃げ始めた。搦め手に向かった鉄砲衆が、山道を這い登って逃れる高森勢に容赦ない射撃を加えると、鉄砲玉を喰らった武者が次々と転げ落ちて来た。搦め手の逃げ口には血まみれの遺骸が重なっている。

逃げる高森勢をなおも撃とうと鉄砲を構える武者に、新助が下知する。

「高森城はすでに落城した。雑兵の一人二人撃ち殺して

も、首を取るほどの値打ちもあるまい。逃げる者はうち捨てておけ……」

高森伊予守惟直は搦め手から落ち延びたのか、斃れている五十ばかりの高森勢の中にその姿はない。

「者ども、火を放って、ことごとく城を焼き払え。櫓、大手門、長塀、足軽長屋もすべて焼き尽くせ。火を放った後に、全軍で矢村大明神の参道で後備えをしておる孫右衛門の加勢に向かう。矢村大明神への道を駆け下って真つすぐに進むのじゃ！」

ちようどその頃、相良孫右衛門は采配を手にして、押し寄せる南郷七城の軍勢をじっと見ていた。

西から高森城の後詰めに押し寄せる軍勢を足止めするため、中郷街道を遮るように、南北に長さ三町余りの馬防ぎの柵が二重に築いてある。一番目の柵と二番目の柵との距離は二十間（約三十六メートル）余り。一番目の柵に取り掛かる敵に、二番目の柵の内側から鉄砲を放てば、鎧武者を確実に撃ち倒せる距離である。

中郷街道を押し寄せる南郷七城の軍勢は総勢千七百余りであろうか。先頭を行く騎馬武者は古めかしい大鎧を纏い、背中には長さ二間もの長大な旗指物を背負い、風が吹けばよろめいてしまいそうな大仰な戦支度である。